

# 万葉集と夏目漱石『草枕』

― 女性の「憐れ」の情をめぐって ―

On the MANYŌSHŪ and the Novel “KUSAMAKURA” Written by NATSUME Sōseki:  
About the Female's Emotion “AWARE”

鈴木 武 晴

SUZUKI Takeharu

## 一、先学の考察

夏目漱石の『草枕』の「二」には、画工<sup>えかき</sup>が茶屋の婆さんから次のような話を聞いた場面がある（本文は新潮文庫夏目漱石『草枕』昭和二十五年十一月二十五日、新潮社発行に拠る。以下同じ）。

婆さんが云う。

「嬢様と長良<sup>ながら</sup>の乙女とはよく似ております」

「顔がかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔しこの村に長良の乙女と云う、美くしい長者の娘が御座り  
ましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想<sup>けそう</sup>して、あなた」

「なる程」

「ささだ男に靡<sup>なび</sup>こうか、ささべ男に靡<sup>なび</sup>こうかと、娘はあけくれ  
思い煩<sup>わづら</sup>ったが、どちらへも靡<sup>なび</sup>きかねて、とうとう

あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おも  
ほゆるかも

と云う歌を咏<sup>よ</sup>んで、淵川<sup>ふちかわ</sup>へ身を投げて果てました」

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅<sup>こが</sup>な言

葉で、こんな古雅な話をきこうとは思いがけなかった。

「これから五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。序に長良の乙女の墓を見て御行きなされ」

余は心のうちに是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつづける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟りました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出での頃御逢いなさったので、一人はこの城下で随一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどっちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさったのを、そこには色々な理由もありましたろが、親様が無理にこちらへ取り極めて……」

「目出度、淵川へ身を投げんでも済んだ訳だね」

「ところが——先方でも器量望みで御貴いなさったのだから、随分大事にはなさったかも知れませぬが、もともと強いられて御出なさったのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御心配の様子で御座んした。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様は又那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内気の優しいかたが、この頃では大分気が荒くなつて、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

右の本文中の「長良の乙女」について、先掲新潮文庫夏目漱石『草枕』の三好行雄氏「注解」に、

架空の少女だが、以下の話は『万葉集』巻八の日置長枝娘子の歌や、巻九の田辺福麻呂の歌「過葦屋処女墓」時作歌一首并短歌」などに基ついて構想されたもの。葦屋処女は二人の男（血沼壮士と菟原壮士、文中の「ささだ男」、「ささべ男」にあたる）から求婚され、苦悩の末に投身自殺したと伝えられる。

と記し、長良の乙女の伝説の引用歌が万葉集巻八所収の日置長枝娘子の歌「秋づけば尾花が上に置く露の消ぬべくも我は思ほゆるかも」（国歌大観旧番号一五六四番歌）であり、この伝説が万葉集の田辺福麻呂歌の巻九・一八〇一〜一八〇三番歌や、高橋虫麻呂の「菟原娘子が墓を見る歌一首并せて短歌」（巻九・一八〇九〜一八一一番歌）に拠ることを指摘している。貴重な指摘である。

佐竹昭広氏『万葉集再読』（二〇〇三年十一月六日、平凡社発行）所収の「漱石と万葉集」には、岩波書店発行『漱石全集』新書判第二十四卷（昭和三十三年刊）に収められている明治三十九年の漱石の手帳に、日置長枝娘子の「あきづけば……」の歌と、「長良の乙女」の素材となった万葉集の田辺福麻呂歌集の「見菟原処女墓歌一首并短歌」の歌が記されているのを発見し、その引用歌に記されている丁数から『万葉集略解』版本からの引用であることを突きとめ、漱石がこの版本を所持していたことも、東北大学附属図書館編「漱石文庫目録」（昭和四十六年刊）によって明らかにした。

さらに、謡曲「求塚」との関連について指摘し、次のように述べている。

萬葉の菟負処女の説話は、後の大和物語にも載り、謡曲「求塚」ともなった。

漱石の謡曲好きは有名である（漱石「稽古の歴史」、全集別冊下、談話）。（中略）

菟負処女についても、漱石は直接、萬葉集から想を得たのではなく、日頃、馴れ親しんでいた謡曲の方から、逆に萬葉へ溯つたと見なすのが自然である。（中略）

「求塚」の説話が古代の萬葉集に由来することを漱石はいかにして知ったか。師匠・知友あたりから教えられたとも考えられるが、手近な注釈書を介して知ったのかも知れない。

その場合、大和田建樹の謡曲通解（明治二十五年初版、二十九年増補版、博文館刊）が最も目に触れやすかつたであろう。（中略）

同書「求塚」、「小竹田男」の頭注に、「萬葉集に「いにしへのさゝだ男の妻とひしうなひをとめのおくつきぞこれ」とあるに拠る」と記してある。

書誌文献学的貴重な考察である。

## 二、万葉集の「あきづけば」の歌の「憐れ」

先学の考察をうけて、本節から万葉集歌「あきづけば」の歌の引用についての文学的考察を行いたい。

漱石は、万葉集歌の「あきづけば」の歌をどのような思いをもつて引用したであろうか。この問いに対する答えとなる表現が見られるのが、「四」の画工と嬢様（志保田の嬢様・那古井の嬢様とも）が対

話する次の場面である。ここには、嬢様の那美の性格描写があり、注目される。

「長良の乙女ながらの五輪塔ごりんとうを見て入らしったか」

「ええ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何の為めか知らぬ。

「その歌はね、茶店ちやみせで聞きましたよ」

「婆さんばあが教えましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云いかけて、これはと余の顔を見ながら、余は知らぬ風をしていた。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが来るたびに長良の話をし、聞かせてやりました。うただけは中々覚えなかつたのです、何遍も聴くうちに、とうとう何も蚊も暗誦あんしようしてしまいました」

「どうれで、むずかしい事を知つてると思った。——然しあの歌は憐あわれな歌ですね」

「憐れでしようか。私ならあんな歌は咏よみませんね。第一、淵川ふちがわへ身を投げるなんて、つまらないじゃありませんか」

「成程つまらないですね。あなたならどうしますか」

「どうするって、訳ないじゃありませんか。ささだ男もささべ男も男妾おとめかけにするばかりですわ」

「両方ともですか」

「ええ」

「えらいな」

「えらかあない、当り前ですわ」

「成程それじゃ蚊の国へも、蚤の国へも、飛び込まずに済む訳だ」

「蟹の様な思いをしなくつても、生きていられるでしょう」

ほーう、ほけきようと忘れかけた驚が、いつ勢を盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張った。一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逆まにして、ふくらむ咽喉の底を震わして、小さき口の張り裂くるばかりに、

ほーう、ほけきよーう。ほーー、ほけつーきよーう

と、つづけ様に嘯する。

「あれが本当の歌です」と女が余に教えた。

漱石は画工に長良の乙女の辞世の歌として転用引用されている万葉集の「あきづけば」の歌について、「憐れな歌ですね」と言わせている。「憐れ」は、一般的にいい・かなしい・せつない、などの意をもつて強い感動や情趣を表す語と捉えられている。この画工の言葉を那美は「憐れでしょうか。」と否定し、「私ならあんな歌は詠みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないじゃありませんか」と述べ、「ささだ男もささべ男も、男妾にするばかりですわ」ときっぱりと言い放っている。ここには、万葉の菟原娘子や、その後の長良の乙女とは異なる那美という近代の女性像が描かれている。が、事はそれほど単純に捉えることはできない。

本稿筆者は、この『草枕』は、「憐れ」を重要語として、漱石の女性や男性、自然などについての考えが述べられていると見る。女

主人公とも言える那美と「憐れ」の有無は深くかわっている。

### 三、那美と「憐れ」

「九」に、画工と那美が鏡の池をめぐって対話する場面がある。

「あなたは何所へ入らしたんです。和尚が聞いていましたぜ、又一人散歩かって」

「ええ鏡の池の方を廻って来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行つて御覧なさい」

「画にかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだ中々投げない積りです」

「私は近々投げるかも知れません」

余りに女としては思い切った冗談だから、余は不図顔を上げた。女は存外儲かである。

「私が身を投げて浮いている所を——苦しんで浮いてる所じゃないんです——やすやすと往生して浮いている所を——奇麗な画にかいて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしょう」

女はすらりと立ち上る。三步にして尽くる部屋の入出口を出るとき、顧みてにこりと笑った。茫然たる事多時。

この「鏡の池」の名の由来については、「十」の画工と馬子の源兵衛の対話から次のような悲恋物語に拠ることが知られる。那美はその物語を念頭において、先のように述べているのである。

「時にこの池は余程古いもんだね。全体何時頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？ どの位昔から？」

「なんでも余つ程古い昔から」

「余つ程古い昔しからか。成程」

「なんでも昔し、志保田の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」

「志保田って、あの温泉場のかい」

「はい」

「御嬢さんが身を投げたって、現に達者で居るじゃないか」

「いんにえ。あの嬢さまじゃない。ずっと昔の嬢様が」

「ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」

「なんでも、余程昔しの嬢様で……」

「その昔の嬢様が、どうして又身を投げたんだい」

「その嬢様は、矢張り今の嬢様の様に美しい嬢様であつたそうながな、旦那様」

「うん」

「すると、ある日、一人の梵論字が来て……」

「梵論字と云うと虚無僧の事かい」

「はい。あの尺八を吹く梵論字の事で御座んす。その梵論字が志保田の庄屋へ逗留しているうちに、その美しい嬢様が、

その梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしても一所にいたいと云うて、泣きました」

「泣きました。ふうん」

「ところが庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は智にはならんと云うて。とうとう追い出しました」

「その虚無僧をかい」

「はい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてここまで来て、

——あの向うに見える松の所から、身を投げて——とうとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも一枚の鏡を持っていたとか申し伝えておりますよ。それでこの池を今でも鏡が池と申します」

この「十」では、画工が鏡の池に来て、思考したことを次のように記している。この中に、那美と「憐れ」のことが語られているのである。

こんな所へ美しい女の浮いている所をかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ歸つて、又烟草を呑んで、ぼんやり考へ込む。温泉場の御那美さんが昨日冗談に云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子の様に揺れる。あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが画でかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。原理に背いても、背かなくつても、そう云う心持ちさえ出

ればいい。然し人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つては凡てを打ち壊わしてしまふ。と云つて無暗に氣榮では猶困る。一層ほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思しくはない。矢張御那美さんの顔が一番似合う様だ。然し何だか物足りない。物足らないとまでは気が付くが、どこが物足りないかが、吾ながら不明である。従つて自己の想像でいい加減に作り易える訳に行かない。あれに嫉妬を加えたら、どうだろう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎悪はどうだろう。憎悪は烈げし過ぎる。怒？ 怒では全然調和を破る。恨？ 恨でも春恨とか云う、詩的のものならば格別、只の恨では余り俗である。色々に考えた末、仕舞に漸くこれだと気が付いた。多くある情緒のうちで、憐れと云う字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情がある女の眉宇にひらめいた瞬間に、わが画は成就するであらう。然し——何時それが見られるか解らない。(後略)

その時が到来した。満洲へ行くためにお金を無心に來た離縁された元亭主(この小説の中では「野武士」と表現されている)に那美はお金を渡す。その後、那美は、志願兵として召集されて満洲に行く久一を、吉田の停車場まで見送る。その停車場で偶然にもその野武士(元亭主)を見送ることになるのである。それは、『草枕』最終「十三

の次のような場面である。

青年は窓から首を出す。「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練のない鉄車の音がごとりとごとりと調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなくて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、又一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごとりとごとりと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている。

「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。

表情に「憐れの念が少しもあらわれて」いない那美に「憐れ」が見て取れたのである。

#### 四、万葉からの女性の普遍的心情「憐れ」

漱石は前節で取り上げた「十」の場面において、画工を通して「人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。」と述べた後、独自の捉え方で、



憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。

と讃美している。

万葉女性の歌に表出された「憐れ」は、長良の乙女の歌の心情の「憐れ」となり、そして那美にも「憐れ」は見て取れた。漱石は万葉から漱石の生きた現代まで通底する女性の「憐れ」を描いたのである。そして、漱石の時代以後も、この「憐れ」は永遠性をもって日本女性の心情を物語るであろう。

(二〇二三年四月二十四日)

(注)

1、本稿第二節、第三節で取り上げた例以外の「憐れ」の例を挙げれば、次のとおり。

a、秋の霧は冷やかに、たなびく霧は長閑に、夕餼炊く、人の烟は青く立って、大いなる空に、わが果敢なき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものの肌を、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。(七)

b、悄然として萎れる雨中の梨花には、只憐れな感じがする。(十一)

(付記)

本稿は令和三年度大学院共同研究「上代文学の後世の文学への影響」の成果に拠る。

受領日 二〇二二年四月二八日  
受理日 二〇二二年六月 八日

